

中学校部活動の機能に関する社会学的考察

—東京都23区の事例を通して—

上越教育大学 藤田 武志

1. 問題の所在

現代の学校は厳しい状況におかれていると言われる。たとえば、不登校の増加からは、価値観の多様化や、学校に通うことの自明性の崩壊などが指摘されている。そのような状況の中で、子どもたちを学校へひきつける「魅力ある学校」づくりの取り組みもなされている。しかし、1992年の全国調査によれば、94.8%の中学生が「学校は楽しい」と回答しており、学校でいちばん楽しいことを一つ選択する設問では、「友達と話したり一緒に何かすること」(74.1%)、「課外の部活動」(23.4%)の順に多く選択されている(NHK放送文化研究所世論調査部編, 1995, 60頁)。つまり、大多数の子どもにとって、学校は未だ魅力ある場所であり続けており、その魅力の一つが部活動⁽¹⁾であると考えられる。

にもかかわらず、部活動をめぐる状況は大きく変化しはじめている。第一に、2002年度から施行される学習指導要領におけるクラブ活動の廃止にともない、部活動も廃止に向かう動きさえある。第二に、部員数の減少による複数の学校による合同部活動の導入や、指導者の不足による外部指導員の導入も試みられはじめた。

しかし、これらの変化は、部活動の当事者である生徒たちを置き去りにしたまま進んでいないだろうか。第一に、中学校学習指導要領の解説からは、クラブ活動の廃止は部活動が広く行われていること⁽²⁾を前提とした施策であ

ることがうかがわれ（文部省，1999，3頁），部活動の廃止の動きは，生徒のニーズに応えるものとはいきれない。第二に，文部省が中学生・高校生のスポーツ活動を総合的に検討するため，大規模な調査をもとにして1997年にまとめた『運動部活動の在り方に関する調査報告書』では，合同部活動を肯定する中学生の割合が46.5%にとどまっているにもかかわらず，合同部活動への環境整備を進めるよう提言されており，外部指導員の活用に至っては，生徒の意見を聞かぬまま促進が提言され，文部省の施策もこのような方針を採っている⁽³⁾。

学校のアカウントビリティが問われ，子どもを主役とする「魅力ある学校」づくりが求められる現在，学校が組織する諸活動の意味と機能を生徒たちの側から捉え直していくことが不可欠であろう。そこで本研究では，中学生の意識を通して，学校における部活動がどのような機能を持っているのかを考察し，部活動の今後のあり方について示唆を得ることを主題とする。

2. 先行研究⁽⁴⁾の検討と課題の設定

本研究の焦点である「中学校における部活動の機能」に着目したものとして，次の四つが挙げられる。

第一に，部活動と授業との関連について，高旗他は，授業に対する意識や態度と部活動の経験などの関連を調べ，部活動経験のあるほうが授業に対して積極的に取り組むことを示した（高旗他，1996）。第二に，授業以外の場面をも検討した吉村他は，学校生活の意識や態度と，部活動の経験との関連を調べ，部活動加入者のほうが積極性，自己表現，学校への満足度などが高いことを見出している（吉村他，1994）。第三に，学校に通うこと自体と部活動との関連では，森田が不登校の研究において，「部活動を無意味・苦痛に感じる」生徒が，出席群（39.4%）よりも不登校群（49.9%）に多いことを見出し，部活動が「制度化された公的フィールドにおける離脱の回路」でありうることを指摘した（森田，1991a，252-257頁）。

これら三つの研究で検討された学校への積極性を「向学校性」と表現する

ならば、部活動には向学校性を高める機能があることが明らかにされている。しかし、生徒文化の研究においては、向学校性の主な規定因を学業成績に求める「地位欲求不満モデル」⁽⁶⁾が一般的であるのに対し、上の諸研究は学業成績を考慮していない点で不十分である。そこで第四に、西島らは、生徒集団、家族、ジェンダーなどと部活動の関係を探ると同時に、学校的秩序への適応についても検討し、学業成績の影響をコントロールしたうえでも、部活動へのコミットメントの度合いが、学校的秩序に対する生徒の適応に独自の効果を持っていることを指摘している（西島他，1999，143-146頁）。そして彼らは、「地位欲求不満モデル」に対し、学校における活動の諸場面に対する生徒たちのコミットメントのありように向学校性の規定因を求める「多元的学校文化モデル」を提出した（西島他，1999，161-162頁）。しかし、モデルの仮説的提示にとどまっており、授業や休憩時間の場面などと部活動の場面とを同時に考慮したうえで、向学校性を実証的に検討してはいない。

また、これら四者は、部活動が一つの学校を単位とする活動であることを前提とする点で共通している。部活動の社会体育への移行⁽⁶⁾や、合同部活動の拡大といった方向性を視野に入れるならば、生徒たちが自分の学校で部活動を行うことをどう捉えているのかも検討し、部活動が組織されているのが学校であることの意味を考察する必要がある。

以上から、本研究では、第一に、学業成績や部活動以外の学校生活場面との関連を考慮しながら、向学校性と部活動の関係について考察することを課題とする。そして、部活動が一つの学校という単位を越えることを生徒はどのように意識するのか、その意識がいかなる要因に規定されるのかを検討することを第二の課題とする。これらの課題の検討を通して上述の主題に接近していくことにする。

3. 研究方法

本稿で用いるデータは、1999年2月～3月に実施した、東京都23区内の6つの公立中学校2年生912名に対する質問紙調査によって得た。価値観の多

様化といった現代的状況における部活動のありようを捉えるため、多様なメディアやスポットへの接近性の高い東京都23区は、調査対象地として適切であると考えられる。なお、対象校の選定は無作為抽出ではないが、地域的に偏らないよう配慮した。

サンプル構成は、男子が479名、女子が433名である。調査対象を中学2年生としたのは、部活動の中心として活躍しはじめている一方で、中学3年生に比べて受験などの影響が相対的に小さく、部活動の機能の検討に適していると考えられるからである。

対象校はすべて部活代替制⁷⁾を採っているが、部活動に加入していると回答した生徒は全体の91.4%であり、主観的には部活動に加入していないと考える生徒が若干存在している。部活動に加入していると回答した生徒のうち、64.9%がスポーツ部活動に、31.6%が文化系の部活動に所属している⁸⁾。

4. 向学校性と部活動の関係

学校に対する積極性としての向学校性は、先行研究では、授業への意識や態度、学校への満足度、不登校傾向のないこと、学校的秩序への適応度などを指標としていた。ここでは、学校の個々の場面ではなく、学校全般に対する積極的な意味づけを向学校性と捉えることとし、学校生活に対する満足度をその指標として用いる。

行事などの特別な場合を除くと、生徒たちの通常の学校生活は、授業、休憩時間、放課後の部活動といった場面に大別できよう。では、これらの場面に関する意識は、向学校性とどのように関係しているのだろうか。

まず、全体的な学校満足度を見てみると、「学校生活について、どのくらい満足していますか」という設問に対し、「とても満足」「まあ満足」を合わせて69.7%の生徒が肯定的に回答した(n=909)。男女別では、男子の74.2% (n=477)、女子の64.8% (n=432) が肯定的に回答しており、男子の満足度の割合が有意に高い (p=0.002: カイ二乗検定)。

次に、学校満足度と学校の各場面に対する意識との関係を検討したい。「ふ

表1 学校満足度×授業充実度×成績（2分割）×性別

性別	学業成績	学校満足度	授業充実度		有意水準
			していない	してる	
男	上 (4・5)	学校に満足している	59.3	86.5	**
		n	27	111	
	中・下 (1～3)	学校に満足している	47.1	85.6	***
		n	121	215	
女	上 (4・5)	学校に満足している	37.5	78.8	***
		n	24	85	
	中・下 (1～3)	学校に満足している	48.7	73.1	***
		n	117	197	

(***p<0.001, **p<0.01:カイ二乗検定)

だんの学校生活のなかで、次のような場面はどれくらい充実していますか」という設問のなかの、「授業」「昼休み」「部活動」という三場面についての回答を用い、学校満足度とクロス集計した。その際、性別や学業成績の影響が考えられるため、それらの要因で統制した⁽⁹⁾。その結果が、表1～3である⁽¹⁰⁾。

表1は、学校満足度と授業充実度とのクロス集計である。性別、学業成績の如何にかかわらず、授業が充実していると意識しているほうが、学校に満足する割合が有意に高い。

学校満足度と昼休み充実度をクロスさせたものが表2である。男子では、学業成績の如何にかかわらず昼休みの充実感を意識しているほうが、学校に満足する割合が有意に高い。一方、女子は、学業成績が中・下位の群においてのみ有意である。つまり、学業成績の中・下位に属する女子生徒にとって、学校満足度には昼休みという場面が重要なのである。

表3は、学校満足度と部活動充実度の関係を示している。男女とも、学業成績の上位群では有意差が見られないが、中・下位群において部活動充実群の学校に満足する割合が有意に高い。すなわち、部活動の充実度は、とくに学業成績の中・下位に属する生徒たちの学校満足度に影響を与えているので

表2 学校満足度×昼休み充実度×成績（2分割）×性別

性別	学業成績	学校満足度	昼休み充実度		有意水準
			していない	してる	
男	上 (4・5)	学校に満足している	55.0	86.3	**
		n	20	117	
	中・下 (1～3)	学校に満足している	32.6	77.7	***
		n	46	292	
女	上 (4・5)	学校に満足している	52.6	73.3	
		n	19	90	
	中・下 (1～3)	学校に満足している	37.1	67.9	***
		n	35	277	

(***p<0.001, **p<0.01:カイ二乗検定)

表3 学校満足度×部活動充実度×成績（2分割）×性別

性別	学業成績	学校満足度	部活動充実度		有意水準
			していない	してる	
男	上 (4・5)	学校に満足している	74.3	85.3	
		n	35	95	
	中・下 (1～3)	学校に満足している	64.3	79.6	**
		n	98	206	
女	上 (4・5)	学校に満足している	63.2	73.8	
		n	19	84	
	中・下 (1～3)	学校に満足している	47.7	72.0	***
		n	88	200	

(***p<0.001, **p<0.01:カイ二乗検定)

ある。学業成績が中・下位に属するのは、全体の72.5%（男子：70.9%、女子：74.3%）であり、少なからぬ生徒に部活動の効果が及んでいると言えよう。

このように、授業、昼休み、部活動の三つの場面は、向学校性に対して効果を及ぼしているが、その働き方は同じではないことが看取された。ただし、この三つの場面は相互に影響しあって向学校性に効果を与えている可能性がある。そこで、各場面の独立した影響力を見るため、学校満足度（満足群と

表4 学校満足度を目的変数としたロジスティック回帰分析

説明変数	ロジスティック回帰係数	有意水準
女性ダミー	-0.291	**
学業成績	0.132	
授業充実度	0.640	***
部活動充実度	0.354	***
昼休み充実度	0.633	***
定数	1.147	***
Model Chi-Square	177.569	
df.	5	
sig.	0.000	

(***p<0.001, **p<0.01)

不満群)を目的変数とし、性別、学業成績、そして、三場面の充実度を説明変数としてロジスティック回帰分析を行い、結果を表4に示した⁽¹¹⁾。

表4に示されたように、三場面の充実度は、各々独立して学校満足度に対し、有意に影響を与えている。女子ダミー変数のロジスティック回帰係数のマイナス値は、女子の満足度の割合が男子よりも低かったことと整合する。部活動の相対的効果は、授業や昼休みに比べて小さいものの、学校満足度に対し、それらの場面とは独立して有意な効果を持つことが確認された。

以上、授業、昼休み、部活動といった場面は、学校満足度で表される向学校性を高める機能をそれぞれ独立して持っており、しかも、それぞれの場面は、性別や学業成績といった属性によって影響が異なっていることが明らかになった。

5. 学校を越える単位の部活動に対する意識

ここからは、部活動が学校を単位として組織されていることの意味を検討するため、部活動が学校という単位を越えることに関する中学生の意識を検討したい。

調査では、「自分のやりたい部活動が自分の中学校にあるとは限りません。他の中学校の部活動にも参加できるとしたら、次のAとBのどちらを選びますか」という質問を設けた。選択肢には、「A：自分のやりたい部活動をするために、放課後にとりらの中学校の部活動に参加する」と、「B：自分のやりたい部活動はあきらめて、自分の学校にある部活動に参加する」という二つを用意した⁽¹²⁾。隣の中学校の部活に参加すると回答した「他校志向」の生徒は46.4%、自分の中学校の部活に参加すると回答した「自校志向」の生徒は53.6%であり、性別や学業成績による有意差はない（n=892）。では、この志向の違いには何が影響しているのだろうか。

まず、現在所属している部活動との関係が考えられる。そこで、「他校志向」「自校志向」という志向性の違いと、次の三つの側面の諸要因とをクロス集計した。すなわち、第一に、練習の過熱化や封建性が多く問題視されることから、活動日の多寡、練習量、練習の自主的決定に関する意識、第二に、部活動内の人間関係が重要ではないかという予測から、上下関係、部員間の人間関係、顧問教師への満足度といった意識、第三に、部活動への取り組み方が影響しているのではないかという予測から、部活動への参加度、充実度に関する意識、である。その結果、いずれの要因も志向性の分化には、有意に影響を与えていなかった⁽¹³⁾。おそらく、これらの諸要因は、自分の学校と隣の学校のいずれの部活に参加したとしてもかかわらざるをえない問題であるため、志向性の分化の規定因とはなっていないと考えるのが妥当であろう。そこで次に、生徒たちが部活動に何を求めているのか、部活動に対する生徒の主観的な意味づけに着目して検討してみたい。

生徒たちが部活動に求めているものを捉える指標として、「部活動のなかで一番楽しいことはどういったことですか」という設問を用い、部活動の志向性とクロス集計した。なお、選択肢には部活動の活動そのものである「練習や活動」、活動の成果を表出する「試合やコンクール」、活動に付随して生起する「友だちとおしゃべり」の三つを用意した。

表5のように、おしゃべりという付随的な活動に楽しみを見出すほど「自校志向」の割合が高まり、試合やコンクールという活動成果の表出に楽しみ

表5 部活への志向性×部活動のたのしみ

(単位=列和%)

	部活動の楽しみ			有意水準
	友だちとおしゃべり	練習や活動	試合やコンクール	
他校志向	39.1	48.9	53.3	**
自校志向	60.9	51.1	46.7	
n	340	282	152	

(**p<0.01:カイ二乗検定)

を見出すほど「他校志向」の割合が高まるという関係が有意である⁽¹⁴⁾。ここから、生徒の部活動への意味づけは一樣ではなく、部活動で友だちと交流したい場合は、気心の知れた自分の学校の友だちと部活動を楽しみたいと考え、部活動で自分の力を試したい場合は、隣の学校に行っても自分のやりたい活動自体を楽しみたいと考える傾向が看取される。

「他校志向」の生徒たちは、部活動における活動内容を重視しており、「自校志向」の生徒たちは、活動内容よりも自分の学校で部活動をすることを重視していると言えるだろう。つまり、彼らの志向の違いには部活動への意味づけがかかわっているのである。

6. 結論と今後の課題

以上、中学校の部活動の機能について生徒たちの意識を通して考察し、次の四点が明らかになった。第一に、部活動は、学校の他の諸場面とは独立して、生徒たちの向学校性を高める機能を持っており、第二に、それはとくに学業成績の中・下位の生徒たちに効果を及ぼしている。第三に、部活動の活動内容を志向する生徒と、部活動を自分の学校でやることを志向する生徒が相半ばして存在しており、第四に、その志向性の分化には、生徒たちが部活動に求めているものの違いが影響している。

では、これらの知見から、今後の部活動についていかなる示唆を得られるだろうか。

第一に、部活動の変化は、生徒たちの向学校性を高める機能を果たす舞台

装置の一つに変化が生じることを意味している。それは同時に、生徒たちの向学校性にも変化をもたらす可能性がある。第二に、部活動は、学業成績の中・下位の生徒たちの向学校性に対して補償的効果を持っている。学業成績による序列化という現実にとさらされる生徒たちにとって、同じ学校内に学業とは異なった原理に基づく空間が存在していることが意味を持つのではないだろうか。第三に、部活動の活動内容を志向する生徒と、自校で行うことを志向する生徒が存在することは、部活動の社会体育への移行や合同部活動といった動向のなかで、学校に部活動が組織されていることの意味を再考する必要性を示唆している。このことは、学校規模の適性化や、部活動を担当する教員に対する「待遇面での改善」(若井, 1996)といった、政策的課題とも密接に関連している。第四に、部活動に対する生徒たちの意味づけが様でないことは、生徒にとっては部活動の存在自体に意味があることをうかがわせる。私たちは、部活動における生徒たちの活動内容や取り組み方に注目しがちだが、部活動は、「日常の社会空間の中に私的世界を築くことのできる意味づけの空間」「離脱空間」(森田, 1991b)としての機能も持つのである。実際、部活動で友だちとおしゃべりが一番楽しいとする生徒は43.9%であり、少数派として無視できる割合ではない。

最後に今後の課題を指摘して稿を閉じたい。第一に、本研究はあくまでも東京都23区における事例研究であり、得られた知見を単純には一般化できない。そこで、今後さまざまな地域の事例研究の積み重ねや、全国規模での調査が必要である。第二に、本研究は部活動全般の機能を検討することを課題としたが、部活動にもさまざまな種類が存在している。そこで、さらにきめの細かい検討をしていくためには、部活動の種類やタイプに応じた分析が必要であろう。第三に、学習指導要領の完全実施後に、部活動をめぐる状況の大きな変化が予想される。特別活動のこれまでの教育課程上の変遷を踏まえつつ、今回の変化のありようと、変化をもたらすものを把握するために継続的な調査が要求される。第四に、部活動の社会体育への移行について、文部省調査では、中学生の保護者の90.6%が「学校に残した方がよい」と回答し、中学校教員の53.2%は「地域に移した方がよい」と回答している(文部

省、1996)。今後の部活動のあり方を考えるためには、部活動に対する保護者や教員の意識について検討していく必要があるだろう。最後に、部活動は学校内に孤立して存在しているのではない。そのため、体育連盟やさまざまなスポーツ団体、地域のスポーツクラブなど、学校外部の諸団体と部活動との関連性や、生徒の家庭環境や学校外での活動などを視野に入れた調査研究が求められよう。

これらの課題の継続的な追究が必要なのはもちろんだが、それらの研究と、現在、中学校が直面している、部活動をどうするか、生徒主体の「魅力ある学校」をいかに創造していくか、という問題に対する学校現場の実践との両者を、いかにして有機的に結びつけていくか、これが最大の課題であるかもしれない。

〈注〉

- (1) 本稿では以下、教育課程内に位置づけられたものを「クラブ活動」とし、教育課程外のものを「部活動」として記す。
- (2) 文部省の調査によれば、中学生の73.9%がスポーツ部活動へ、17.1%が文化系の部活動へ参加していることが示されている。なお、これは多肢選択の設問であるため、回答に重複があることに留意する必要がある(文部省、1996)。
- (3) 報告書は、文部科学省のホームページ(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201.htm)で閲覧できる。
- (4) 部活動に関する研究は、スポーツ部活動を中心に蓄積されているため、本研究における先行研究の検討もスポーツ部活動に偏らざるをえない。また、注(2)で示したように、生徒たちの加入状況もスポーツ部活動に大きく偏っている。
- (5) 耳塚(1980)、潮木他(1980)、秦(1980)などを参照。
- (6) 2000年9月に出された文部省の「スポーツ振興基本計画」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/12/09/000905.htm)を参照。
- (7) 文部省調査によると、中学校の約6割が原則として部活動には全員加入としており(文部省、1996)、クラブ活動を部活動によって代替する部活代替制的な運用をしている学校が多数派を占めていると言えよう。なお、クラブ活動と部活動のそれぞれの特徴については、中井(2001)を参照。また、部

活代替に至る特別活動の教育課程上の変遷については、山口（2001）を参照。

- (8) 調査やサンプルの詳細については、西島他（1999, 141-143頁）を参照されたい。
- (9) 分析の段階で、興味深いことに、学業成績（5段階で自己申告）の上位（5・4）と中（3）・下位（2・1）において異なった結果が出たため、クロス表は学業成績については上位と中・下位の二段階で提示した。
- (10) 学校満足度は満足群と不満群に分け、満足群のパーセンテージのみを表示した。なお、表中のnは、満足群と不満群を合計した数値である。
- (11) 性別は女子に1を割り当てた女子ダミー変数、学業成績は5段階（1～5）の学業成績変数、それぞれの場面の充実度については、「とても充実している・まあ充実している・あまり充実していない・まったく充実していない」の4段階で回答された充実度変数を用いた。なお、これらの諸変数はすべて標準化して投入した。
- (12) 調査対象校のいずれにおいても、隣接する中学校が通えないほど遠い場所にあるというケースは見られなかった。
- (13) スポーツ部活動と文化系の部活動といった違いによって統制しても、結果は同様であった。
- (14) スポーツ部活動と文化系の部活動という違いで統制すると、スポーツ部活動においてのみ有意差が見られた（運動部： $n=507, p=0.029$, 文化部： $n=245, p=0.394$, カイ二乗検定）。勝利至上主義や練習の過熱化などの批判が多くなされる運動部のほうに、部活動への意味づけと志向性との間に関係が見られるのは興味深い。

〈引用・参考文献〉

- (1) 青木邦男・松本耕二（1997）「高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因」『体育学研究』第42巻第4号, 215-232頁。
- (2) 秦政春（1980）「現代学校の選抜機能と生徒文化」『福岡教育大学紀要』第30号, 第4分冊, 63-87頁。
- (3) 桂和仁・中込四郎（1990）「運動部活動における適応感を規定する要因」『体育学研究』第35巻第2号, 173-185頁。
- (4) 松本富子・石渕佳子（1995）「中学生・高校生の運動部活動に対する意識構造について」『群馬大学教育学部紀要（芸術・技術・体育・生活科学編）』第30巻, 159-174頁。

- (5) 耳塚寛明 (1980) 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集, 111-122頁。
- (6) 文部省 (1996) 『中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査結果の概要』。
- (7) 文部省 (1999) 『中学校学習指導要領 (平成10年12月) 解説—特別活動編—』ぎょうせい。
- (8) 森川貞夫・遠藤節昭編 (1989) 『必携 スポーツ部活動ハンドブック』大修館書店。
- (9) 森田洋司 (1991a) 『不登校現象の社会学』学文社。
- (10) 森田洋司 (1991b) 「私事化社会の不登校問題—プライベート・スペース理論の構築に向けて」『教育社会学研究』第49集, 79-93頁。
- (11) 中井孝章 (2001) 「クラブ活動・部活動と人間形成」山口満編『新版 特別活動と人間形成』学文社, 160-173頁。
- (12) NHK 放送文化研究所世論調査部編 (1995) 『現代中学生・高校生の生活と意識 第2版』明治図書。
- (13) 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子 (1999) 「中学校生活と部活動に関する社会学的研究—東京23区内における質問紙調査を通して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻, 137-163頁。
- (14) 城丸章夫・水内宏編 (1991) 『スポーツ部活はいま』青木書店。
- (15) 杉本厚夫 (1986) 「中学・高校運動部員における社会的アンビバランスの変容」『体育学研究』第31巻第3号, 197-212頁。
- (16) 高旗正人・北神正行・平井安久 (1996) 「中学生の『向学校性』に関する調査研究」『岡山大学教育学部研究集録』第102号, 249-258頁。
- (17) 潮木守一・藤田英典・滝充・佐藤智美・川嶋太津夫・岩田弘三 (1980) 「中学校文化の構造的分析—進路展望の形成過程—」『名古屋大学教育学部紀要 (教育学科)』第27巻, 171-216頁。
- (18) 内海和雄 (1998) 『部活動改革—生徒主体への道』不昧堂出版。
- (19) 吉村斉・坂西友秀 (1994) 「学校生活への満足度と部活動との関係(2)」『埼玉大学紀要 (教育学部) 教育科学(Ⅱ)』第43巻第1号, 53-68頁。
- (20) 若井彌一 (1996) 「部活動の教育的意義と法的検討課題」『教職研修』第25巻第4号, 教育開発研究所, 126-129頁。
- (21) 山口満 (2001) 「特別活動の歴史的変遷」山口満編『新版 特別活動と人間形成』学文社, 21-43頁。

[キーワード]

中学校，部活動，生徒の主観的意味づけ